



30 キリンとの日々（最終回）

2014.9 執筆

2002年10月、キンモクセイの香りがもう終わりかけの頃、私の担当がキリンに変わりました。初めての大型獣の担当で、不安ばかりでした。

あれから12年があっという間に過ぎキリンの担当を離れることになりました。

キリンという知名度の高い動物は、実はよくわからない動物でした。他の動物にはない縦長の体型、首も脚も異様に長く、常に無言で表情もよくわかりません。彼らにとって何が良くて何が悪いのか……。謎多きこの動物のことが、12年でやっと少しわかってきた気がします。動物飼育に終わりはありませんから、これはキリンでなくても同じことです。まだまだ知らないことがいっぱいあるのです。

以前8年間「おとぎの国」を担当しており、キリンの前を1日に何度も通っていました。しかし、私はキリンをあまり見ていませんでした。キリンについて何も知らなかったのととても戸惑いました。わずかな知識の中の一つに「神経質な動物」ということがあり、とにかく驚かせないように気を遣って接しなければいけないと思っていたのです。

私がキリンの担当になった時、まだ3歳のキヨミズ1頭しかいませんでした。前任者に引き継ぎを受け、キヨミズの穏やかさに安心したと同時に驚いたのです。「キリンでそんなに神経質じゃない……」。

キヨミズが来園した時、1歳半という幼さに加え、仲間がいない環境に落ち着きがなく首を反らして歩き回っていたそうです。当時の担当者はキヨミズを落ち着かせるため、彼と接することに時間を費やしたと聞いています。そのようなことがあり、キヨミズはヒトに対して穏やかな性格になったと思っています。

京都市動物園はそんなに大きくない動物園です。キリン舎は今でこそ広くなりましたが以前のキリン舎はとても狭く、それが私にとってはキリンとの距離が近くていろいろなことを知るのに役立ちました。

さらに作業中でも常に観察が出来るよう、室内とグラウンドの間の扉に馬せん棒（扉は開けていてもキリンが出入りできないような横棒）を2〜3本設置してもらいました。それによって部屋の中で作業している時はグラウンドの様子を、グラウンドで作業している時は部屋の中の様子をチラチラと観察できるようになっただけでなく、時々寄って来るキリンと接することができるようになり、さらに距離が縮まりました。

そのたった2〜3本の横棒は魔法の棒でした。その棒のおかげで蹄のケアも出来るようになり、トレーニングもできるようになり、お客様が室内からキリンにエサやりをするイベントもできるようになりました。

新しい今のキリン舎にはそれを活用し、「馬せん棒扉」と呼んでいる扉を付けました。

さて、その魔法の棒はそれから生まれる4頭のコドモたちにも大いに役立ったのです。おかげで4頭とも「触れるキリン」に育ちました。どんな動物でもコドモたちは好奇心旺盛です。私たちが呼ばなくても勝手に馬せん棒越しに寄ってきます。その度にこちらからも近寄り、ヒトとの距離に慣らしていきます。担当者に慣れると、担当者以外のヒトにも怖がりません。初めて会うお客様も怖がりません。さらには大きな音や振動、見慣れない物に対してもあまり動じない腰の据わったキリンに育ちました。

動物園の動物たちはペットではありませんから、触るのはかわいがるためではありません。彼らがヒトや物など様々な環境に神経質にならないようにするためです。

他の動物もそうですが、飼育しているからには普段から管理の出来るように飼育することは重要な事なのです。例えば、何か調子がおかしいけれど原因が分からない時、私たちなら自分で症状を訴えることはもちろん、血液検査をしたり、レントゲンを撮ったりと、原因を探す検査をします。動物たちも同じで、話は聞いてあげられませんが普段の観察でそれを察したり、ヒトと同じような検査をしたりもします。しかし、大型の動物は簡単に捕獲し保定（動物とヒトお互いが安全に検査や処置ができるように持つこと）することはできません。しかも、キリンとなるとさらに特殊な体型のため、麻酔をかけて検査するのはリスクが高いので簡単にはできません。そのような時のために、普段からヒトとの距離を縮めておいたり、検査や手入れができるようなトレーニングをしたりしておくのです。

つまりは日々の接し方と観察によって、その動物が「残念な死」をせずに済む可能性が高まるわけです。

「残念な死」とは、予測可能な事故や管理の仕方によって亡くなってしまうことを私はそう言っています。例えば、隙間に首や首を挟んで抜けなくなってしまう死んでしまう、床で滑って頭を打ったり脚を痛めたりして死んでしまう、蹄が異常に伸びすぎて脚や内臓を痛めて死んでしまう…などなどです。事前にそうならないように気を付ければ防げることもあります。ミスは誰にでもありますが、それらを恥ずかしがらず事実を共有して二度とないように当事者以外の人も気を付けることも大切です。

100年以上の飼育歴がある日本の動物園のキリンは多かった時で約230頭いましたが現在は約150頭です。

1907年に初めて日本にキリンが導入されましたが、飼育方法が確立されていないために次々と亡くなっていったり、戦争もあつたりでさほど多くは飼育されていませんでした。しかし、1950年代からはどんどん増えていきました。と、いってもその時代は繁殖して増えたというより、次々に日本にキリンが入ってきていたのです。

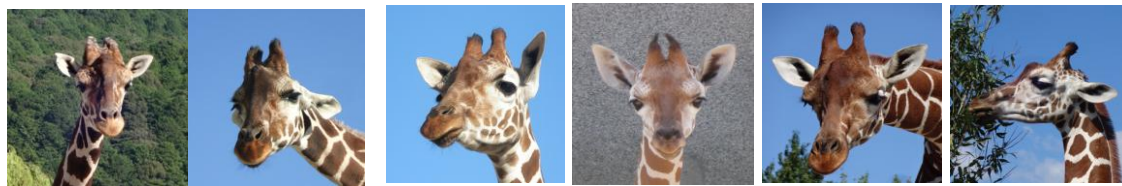
現在は野生のキリンはもちろんのこと、海外の動物園からさえキリンを入れることは難しくなっています。そのため、日本国内で正しい管理をして健康なキリンを飼育し、その上で繁殖をして増やしていかなければ日本からキリンがどんどん減って行ってしまいます。「残念な死」も減らさなければなりません。それらを防ぐにはどうしたらいいのかが大きな課題だと思います。

さて、キリンタイムズⅡも今回が最後になりました。私がキリンと間近に過ごしてきた日々の中で得たことは大きな財産です。これらを自分の中にしまい込まずに日本のキリンの力になれるのなら何らかの形でこれからも発信していきたいと思います。もちろんこれからの自分の飼育にも活用し、精進していきます。

今まで、キリンタイムズ、キリンタイムズⅡを愛読して下さった方々に感謝いたします。ありがとうございました。

そして、6頭のキリンたちもありがとう!!

タカギナオコ



キヨミズ（♂） ミライ（♀） リュウオウ（♂） オトワ（♀） シウン（♀） ウリュウ（♂）